

ダンカン・スミス党首下のイギリス保守党

——党首選から二〇〇三年統一地方選挙まで——

成 廣 孝

はじめに

本稿の目的は、ダンカン・スミス党首当選以後のイギリス保守党の党内政治と、復活に向けた戦略の展開を検討することである。保守党にとってサッチャー以後の時代は、① New Labour の中道化、② 保守党の経済運営能力への信頼低下、③ マーストリヒト条約批准以降の保守党内規律の低下、④ 保守党党員の減少と組織の弛緩、⑤ ヨーロッパ統合の深化と欧州通貨統合、⑥ 難民問題の深刻化・多文化主義の浸透、⑦ サッチャー・メイジャー期に生じた社会変化、犯罪の増加や貧富の差の拡大、階級投票の弛緩、保守党の伝統的価値と社会の価値観のズレ、⑧ 公共サービスの質の低下、といった諸条件によって特徴づけられる。これらの多くはサッチャリズムの成功そのものが生み出した負の遺産であり、「ポスト・サッチャリズム」を模索する上で必然的に直面せざるをえないファクターである。そしてサッチャリズムの成果・影響が巨大であるだけに、ポスト・サッチャリズムを目指すことは、必然的に党内における伝統主義と現代化との間の紛争を招くことになる。

一 ‘Renewing One Nation’ とタンカン・スミス保守党の政策的展開

拙稿(成廣二〇〇二)で検討したように、ヘイク期の「思いやりのある保守主義」は、「社会」——ここでは家族やコミュニティ、学校、ヴォランティア・セクタを指す——の再生を一つのテーマとしていた。二〇〇一年末に提出されたミニ・マニフェスト‘Renewing Civil Society’⁵⁾は、総選挙のキャンペーンで中心的地位を占めることこそなかったものの、公共サービスや犯罪など様々な社会問題の解決のため、保守党の新たなアプローチを代表するものである。このプロジェクトはタンカン・スミス体制下にも‘Renewing One Nation (RIN)’として継承されており、「フェア・ディール (Fair Deal)」とも呼ばれ「インクルージョン」を標榜する現保守党の公式の現代化アジェンダにおける理論的・イデオロギー的・政策的基礎をなしている。政策策定に先立って「ワン・ネーション・ヒアリング (One Nation Hearings)」と呼ばれる視察も行われた。

RINでは、現代の「五人の巨人 (Five Giants)」として、「衰え行く学校 (failing school)」、「犯罪 (crime)」、「低水準の医療 (sub-standard healthcare)」、「小児期の貧困 (child poverty)」、「老齢期の不安 (insecurity in old age)」を挙げ、これらに対処するうえでの五原則として、①「われわれは一つの国民である (We are One Nation)」②「予防は治療より優れている (Prevention is Better than Cure)」③「個人的ケア (Personal Care)」④「小やちもの・ローカルなものは美しい (Small and Local is Beautiful)」⑤「社会は国家に先立つ (Society before the State)」と定めた原則を定めている。これら「五人の巨人」は公共サービスの改善や犯罪など、現在のイギリス国民にとって関心の高いテーマに集中している。

この中でキーワードは、「コミュニティ」、「市民社会 (civil society)」、「コミュニティの全体性 (the wholeness

of community)・「社会的一体性 (social integrity)」・「人間関係 (personal relationship) のネットワーク」といった、いわゆる共同体主義 (communitarianism) と深い関連を持つものであり、個別の政策とも有機的に関連づけられている。犯罪問題に関しては、地域における警官の巡回とともに、人間関係の再建、特に個々の子供に対し、早期から個人的なケアを行うことによる犯罪の予防、反社会的行動を犯した若者を対象とするリハビリテーションといった施策と、そうした地域活動において、教会に代表されるヴォランタリー・セクタの役割を強化することが注目される⁽⁵⁾。教育問題では、校長による学校運営の自律性を増すとともに、宗教系学校への支援の拡大、「サブシディアリティ原理 (subsidiarity)」即ちなるべく子供に近い保護者、教師そしてコミュニティを基盤とする慈善によって担われる、人格教育 (character education) が重視されている⁽⁶⁾。「ヴォランタリー・セクタのエンパワーメント (empowerment)」については、労働党の目標設定にみられる「国家中心主義」的な運営と、「英米のリバタリアン」の、国家によるヴォランタリー・セクタ支援を完全否定する見解の双方を批判して「第三の道」⁽⁷⁾、税制による支援や「市民社会局 (Office of Civil Society)」の新設によるグラント賦与手続きの簡素化などを提案している。これらの政策のなかで特に宗教団体への期待は特徴的であり、「信仰を基盤とする社会的活動 (faith-based social action)」の促進という主張にも確認することができる⁽⁷⁾。二〇〇三年五月には党の公式マニフェスト ‘Sixty Million Citizens’ として提示されている (The Conservative Party 2003c)。

こうしたR1Nの展開と平行して、保守党から個々の政策領域で具体的な政策案が提出されてきている。二〇〇二年党大会にあわせて発表されたシニ・マニフェスト ‘Leadership with A Purpose’ (2002) で提案された二五の政策の主要なターゲットは、R1Nアジェンダと同じく教育、医療、犯罪、高齢層の不安への対策などからなっている⁽⁸⁾。

これらの保守党のターゲットのなかでも、国民の関心の高いNHS改革に関しては、段階的に詳細な政策文書が

提出された。'Wrong Prescription'では、アメリカやヨーロッパ大陸、オセアニアなどの医療制度の検討を行い、労働党政権の課金徴収 (prescription) 増加の方針に反対して、NHSの「利用の時点では無料」という理念を堅持しつつ、一方で財源と組織の多様化を進めることを主張している (Evans and Williams 2002; Williams 2002)。これに続く政策文書 'Setting the NHS Free' (2003) で強調されているのは、「政治家の排除」「専門家による自律的な運営」「患者の選択の拡大」である。ここでは治療の質ではなく、投資した額や待機リストの数値などで判断する「ターゲット文化 (target culture)」が批判の対象となっており、患者ごとの特性に應えるためには、医師やナーース、経営者に自律性を与えることが必要とされている。⁽⁹⁾

RINや個別の政策のバックボーンとなるイデオロギーには、家族的価値やキリスト教的価値の強調など、保守的な側面が強くみられる。これはサッチャー期以降現代イギリスにおける若者の非行や犯罪の増加、片親家庭の増加に代表される「社会的排除 (social exclusion)」の根本原因を、伝統的価値の崩壊に求め、その再構築を目指すという、サッチャー期の宿題への一つの解答であるともできよう。一方でこれが福祉国家の「ガヴァナンス構造」の変化や「福祉ミックス」、⁽¹⁰⁾「福祉社会」論、地域ケアの重視などの、必ずしも保守的動機から発しているわけではない提案と、方向性を同じくしていることも看過できない。ニュー・レイバーの政策をみても、社会的排除を解決するために教育を最重要項目に掲げるとともに、市民社会・社会資本・ヴォランティア・セクタの活用を謳っている点では、共通する点が多くみられる。ネオ・リベラル・コンセンサスにとどまらない新たな政策的合意の芽生えとみることも可能であろう。

RINでは労働党との差異化のために国家によるコントロール、数値目標の達成の偏重に狙いを定めている。これらはそもそもニュー・レイバーがサッチャリズムおよびメイジャー期に導入されたNPMから引き継いだものでもあることを勘案すれば、サッチャー・メイジャー期にとられた手法に対するアンチテーゼと見ることもできるが、

国家による運営を崩していくという方向性についてはサッチャリズムの徹底という急進的な面も持ち合わせている。しかしながら、サーヴィスの供給面に比べて、国家のコントロールのような問題は有権者にとってあくまで二義的な問題であり、むしろこのような支出の増加なしに制度改革によって質と効率の向上を実現できると主張することは、サッチャリズムの延長線上にある公共サーヴィス切り下げにすぎないという批判に脆弱であり、現行のNHSの制度に信頼を抱いている有権者を警戒させることになりかねない。よってこのような政策が保守党の公共サーヴィス運営に対する不信感をどの程度回復できるのかは未知数であるといわねばならない。⁽¹⁾

二 モダナイザーの主張と女性問題

二・一 モダナイザーとダンカン・スミス

モダナイザーにとつての「現代化」とは何か。それはサッチャリズムのために大きな変化を遂げた現代イギリスで生じている問題に向き合うために、保守党が「変化」することを意味している。モダナイザーたちは、サッチャー以後の世代としてその自由市場志向は当然の前提としたうえで、サッチャリズムがイギリスと保守党にもたらした社会的な負の遺産と保守党自らのアナクロニズムに対して率直に向き合うことを求めており、バーンマス大会におけるメイ演説に代表されるように、右翼的で「naughty」な政党、有権者が見向きもしないテーマに頑迷に固執する政党というイメージの払拭を最優先している。彼らは「Missing Conservatives」が他の政党に忠誠心移すことを警戒し、特に自由民主党の進出に強い危機感を覚えている。代表的な閣内モダナイザーであるレトウィン(Oliver Letwin)影の内相は、ソフトな難民対策⁽²⁾に加え、次回の選挙で減税の公約はすべきでないという主張を繰り返してきた(Tory Reform Group 2001)。

また、ポータティロ周辺の動きとしては、〇一年総選挙後、モダナイザー系のシンクタンク Change Policy Exchange が設立されており¹³⁾、なかでも Change のコープ (Michael Gove) とクーパー (Andrew Cooper) 現世論調査会社 Populus 所屬) による 'Case for Change' は、民営化に代表されるラディカルな改革の提案や支出の額への言及を避け、何よりもまず公共サービス改善に対する保守党のコミットメントに対する信頼を回復することを求めている¹⁴⁾。伝統的な党内「ウェット」の団体「トリー改革グループ (Tory Reform Group)」の主張もこれと大きく違わない¹⁵⁾。

公共サービス再建に注目するという点では方向を同じくしながらも、モダナイザーたちの主張と影の内閣の現在の公式の政策との間には一定の緊張がみられるのは否めない。R1Nのなかには、Change に属するモダナイザーであれば受け入れがたいような、保守的な家族的、宗教的価値観が表明されている¹⁶⁾。一方で、R1Nアジェンダの策定には、代表的モダナイザーのレトウインやウイレッツらがヘイグ期以来継続的に関与しているのも事実である。このことから、モダナイザーと総称されているなかにも、伝統的価値を尊重しつつ新しい価値観やライフスタイルにも寛容を示す者から、ポータティロ周辺のよりポストモダンの価値への適応を優先する者まで、ある程度の幅があることがわかる。現状では後者が党のイニシアティブを握ることは難しいうえに、彼らがサッチャリズムへの反省を超えて、どのような政策を軸に新しい保守主義を構築し、New Labour との差異化を図っていくのかということも、未だ明らかにされていない¹⁷⁾。

二・二 保守党と女性

保守党における女性・エスニック・マイノリティの扱いは、モダナイザーにとっても、インクルージョンを唱えるダンカン・スミスにとっても試金石となるが、両者の温度差は次第に明らかになってきている。保守党の女性間

題には二つの側面がある。一つ目が若い女性有権者からの支持獲得の失敗であり、二つ目が女性党員の保守性による、女性候補者選定の阻害である。

第一の点に関しては、新しい形での「ジェンダーギャップ (modern gender gap)」の顕在化が Norris (一九九九) によって指摘されている。従来、女性はより保守党に投票する傾向が強いとされていたが、戦前生まれの世代において依然保守党支持が高いのに比べて、若い女性はより労働党に投票するようになってきている、というのである (Lovenduski 2001; Hayes 1997)。

第二の候補者選択の問題については、従来から都会的なキャリアをもった女性候補が地方組織に所属する一般の保守党員の信認を得るのは難しいということが指摘されてきた (Lovenduski et. al. 1994; Norris and Lovenduski 1995)。これは「ジェンダーギャップ」の原因であると同時に結果でもあるが、保守党が女性議員を輩出することができず、特に女性のなかでもキャリアを積んだ現代的な女性を敵視・阻害しているというイメージの払拭は党内女性組織やモグナイザーたちにとっては切実な問題である。¹⁸⁾

〇一年一月からジリアン・シェパード (Gillian Shepard) が党副幹事長に就任し、メイとともに女性候補者の増加 (二割以上が目標とされた) を役割を担っていたが、その後メイが党幹事長となったことで、女性候補者の採用が進むことが期待された。しかし、それ以後も女性候補の選任、特にセーフ・シートでの候補者は、一向に増加の兆しを見せなていない。二〇〇三年一月には、〇一年総選挙で Calder Valley の候補者として善戦したキャトリング (Sue Catling) が deselection の憂き目にあつた。モグナイザーたちにとって、女性候補の増加と女性有権者の支持拡大は保守党が 'nasty' でなくなるための重要なファクターであり、ランスリー (Andrew Lansley) は男女同数の候補者リスト制導入を主張している。しかし、この間ダンカン・スミスは女性とマイノリティの候補を増やすよう努力すると繰り返しながら、クォータ制 (quota) などのより積極的な手段の採用は明確に拒否している。

三 保守党内政治のメカニズム

これまでの議論で、ヘイグやダンカン・スミスが複数の軸を巡って党内紛争に悩まされてきたことを指摘してきた。現在の保守党にとって必要なことは、ニュー・レイバーにかわる新しい政策的オルタナティブを練り上げると同時にリーダーシップと党内の結束を実現することであるが、現在の保守党においてそれは容易なことではない。

三・一 党内対立の様相

拙稿(成廣二〇〇二)では、ダンカン・スミスのタカ派的政治姿勢と、当選直後におきた鞍替え事件など党内の混乱についてふれ、保守党の党内融和に関し悲観的な展望を示したところで筆を置いていた。保守党離脱組による政党 People's Alliance が二〇〇三年三月に旗揚げした¹⁹⁾。ゴールドスミス(James Goldsmith)の Referendum Party の末路にみられるように、イギリスの選挙制度のもとで新党が議席を獲得するのは並大抵のことではない。しかし、Referendum Party や United Kingdom Independent Party (UKIP) がそうであったように、保守党から若干の票と議席を奪うことは可能かもしれない²⁰⁾。また、それだけの離脱者を出しているという分裂イメージの悪化も軽視できない。

一方でダンカン・スミスは「弱者のための党」と名乗るなどインクルージョンへの一定の理解を示すことも忘れなかった。ダンカン・スミスは二〇〇二年七月右派のデイヴィスを党幹事長から解任してメイに代えた件で、党内右派から社会的リベラリズムに転向したとして非難を浴びたが、これに対抗してドレルに代表されるモダナイザーたちがダンカン・スミスとその現代化アジェンダへの支持と党の連帯を訴えてみせたことは、党内融和の兆しとし

て期待された。

しかし、ダンカン・スミスとモダナイザーとの蜜月は続かなかつた。同年一月に労働党によって提出された、非婚カップルやゲイによる養子縁組の承認の議決にあたって、多くのモダナイザーたちが党議拘束なしの自由投票を要求したのに対し、ダンカン・スミスは「three line whip」に固執して批判を浴びることになった。これによりバーカウ (John Bercow) が影の閣僚を辞し、ハワードら現代化に消極的な首脳陣への批判を強めた。ダンカン・スミスは反対者に対して強い態度に出ることができず、「unite or die」と結末を訴えるしかなかった。モダナイザーと社会的に保守的なダンカン・スミスとの間には依然として距離があることが明らかになった。

ダンカン・スミスの支持率がなかなか上がらないことに加えて、社会的問題による対立が続き、党首批判や陰謀、鞍替えの噂が絶えることはない。ダンカン・スミス自身強硬な反欧派であるとともに、その社会的権威主義も否定したい。R I N アジェンダにも彼の宗教的価値・家族的価値観が反映されており、全てのモダナイザーにとって全面的に受け容れられるものには成りにくい。

三・二 「人民投票的政党化」の帰結…再訪

阪野(二〇〇一)は、「党内民主化のパラドックス」として、理論的に「一般黨員への権限付与は、イデオロギー的に急進的で党指導部にとって厄介な活動下層をバイパスすることによって、かえって党指導部の自律性を高める方向に作用する」と述べた。このような制度改革はダンカン・スミス期において、どのような効果を生じさせただろうか。

この制度改革に関しては、ヘイグのレフェレンダムが二者択一的なものであることや、そもそも最後の二人が黨員にとって最も選ばれた二人にならない可能性もあることなど、さまざまな民主制度としての瑕疵が指摘さ

れているが、問題はそこに留まらない。

Kelly (二〇〇二) は、「フレッシュ・フューチャー」によるヘイグの党改革を、労働党の九四年党組織改革に倣って党中央からのトップダウンによる強力なリーダーシップの実現を目指したものである点を強調するとともに、党評議会設置などの組織改革により中央からのキャンペーン等への統制が強まった一方で、これが党員拡大・選挙キャンペーンにおける地方組織・党員の活力の回復といった目的に資することはなかったとする。「フレッシュ・フューチャー」や二〇〇〇年のマニフェストへの党員レフレンドラムも、支持率こそ九〇%を超えたものの、それぞれ投票率は三三%、一六%に留まった。

次に問題となるのは、保守党党員と一般有権者の選好のズレである。二〇〇一年党首選挙の最後の段階では、ユーロ問題が最大イシューとなり、世論調査も保守党員の主要な関心がヨーロッパ問題であることを示したが、全有権者中にとつてのダンカン・スミスの人気や評価もユーロ問題の優先度は高くなかった。さらに、選挙から一年が経過した二〇〇二年一月八日の Sunday Telegraph の世論調査では、保守党に投票した中で三六%がダンカン・スミスを選んでよかったと評価しているのに対し、保守党員は五五%がそう答えている。年齢でみた場合の保守党支持者全体のユーロに関する意見に比べ、党員はいっそう年齢が高いということを勘案するなら、彼らはいっそう経済的・社会的に保守的かつ反欧的とみることができよう。これでは、保守党議員によりクランクのようなユーロ加盟支持者が選ばれたとしても、最終ステージで当選することは非常に困難⁽²²⁾ということである。現在のところこの制度は、国民の選好からは離れた党首を選び出すバイアスを持っているといわざるをえない。「人民投票的政党化」は、少なくとも現状では、保守党の周縁化をビルト・インし、現代化をブロックする仕組みといってもよからう。これに付随して、選挙区協会における女性候補者へのバイアスも存在している。

ヘイグは自分のユーロ政策の支持を確立するため、党内レフレンドラムを実施した。ダンカン・スミスは、養子

縁組の問題に際して、選挙区協会に対し議員への deselection の脅しをかけさせることを検討していたといわれる。今回の制度改革は、公選で選ばれた党首が活動家や党員の支持を資源にできる可能性を開いたのかも知れないが、ダンカン・スミスは結局そこまでの手段はとれなかった。現在のところ今回の制度改革は、党内民主化、中央リーダースHIPの強化と党组织の活性化などのいずれの側面からみてもめざましい結果を生んでいるとはいえず、むしろ有権者と保守党員の選好のズレという負債を残した。これは党内民主化を進めて労働組合や極左活動家の天下を許した七〇年代の労働党に比すべきオウン・ゴールである。いずれにせよ、議員・選挙区の活動家・党首・有権者の関係は今しばらくは流動的なままであろう。

四 右傾化の兆しと二〇〇三年統一地方選挙

〇二年末から〇三年にかけて保守党は、世論調査の上では労働党との支持率の差を一〇%台にまで縮めた（ただし、保守党と自由民主党との差も縮まった）。イラクとの緊張が高まり、軍事攻撃に邁進する労働党政権に批判が集めた二月の The Times 世論調査においては、労働党の支持率三五%に対し、保守党支持率は三四%と、一ポイント差にまで縮まった。

一方、一月下旬に行われた下院におけるセクション二八撤廃を含む地方政府法の修正の評決で、ダンカン・スミスは性教育における教材の選択を親に吟味・投票させるといふ修正案を提出したうえで自由投票に任せたが、モダンイザーの多くはこれに同意しないか棄権した。再び三月に上院でおこなわれた議決に関しては、ダンカン・スミスはモダンイザーに配慮してさらなる修正案を提出することを回避せねばならなかった。

一方、二月になるとダンカン・スミスは、党委員長メイや党評議会 (Party Board) に無断で、ポータイロに近

いモダナイザーのマクレガー (Mark McGregor) を評議会の最高責任者の地位から解任し、右派ヨーロッパ懷疑派の側近レグ (Barry Legg) に代えた。政策担当主任であったナイ (Rick Nye)、キャンペーン主任のギルバート (Stephen Gilbert) も同時に更迭された。マクレガーは、弱者救済や公共サービス改善などの政策を推進していたことで知られ、ダンカン・スミスが右旋回しようとしているのではないかと疑念を呼んだ。さらに、右派のプリンスであり、強硬な反ヨーロッパ派のレッドウッドをフロントベンチあるいは党委員長メイの後釜に据えようという動きがあったことが噂された。再び存在感を高めつつあるレッドウッドは、より対決的な政策を求めてダンカン・スミスを鼓舞していた。

このタイミングでモダナイザーを放逐したことは、世論調査において労働党との距離が縮まったのをみたダンカン・スミス周辺が、本来の政策をもって攻撃に打って出ることを意図したものと推測されている。しかし、この突如の交代劇はその手続的な問題もあり、ポータイロ派のみならず多くのバックベンチャーの憤激を呼び、ダンカン・スミスは二月二十六日、一九二二年委員会の役員による査問をうけ、交代劇によって党を混乱させたことを釈明せねばならなかった。²⁵⁾

ダンカン・スミスは〇二年末、いったんは取り下げていた減税の主張を復活させ、翌年二月になると、労働党政権により四月に予定されていた、NHS支出を補填するための国民保険料の1%増額を撤回させることを表明した。また、影の大蔵省チームのフライト (Howard Flight) に命じて、二〇%のカットを目標に公共支出のうち削減可能なものをピックアップさせた。所謂「フライト・プラン (the Flight plan)」であるが、公共サービス改革を重視するモダナイザーの当惑を招くとともに、政府による攻撃も招いた。²⁶⁾

三月一二日の The Times 世論調査では、支出増に比して公共サービスの改善は進んでおらず、四月の増税も支持されていないという結果となった。一方ICMの世論調査によれば、支出が有効利用されていないという点につ

いてはほぼ同様であるが、追加支出の決断は六四％の支持を得ているという異なる結果がでていいる。しかし、地方税の大幅増税を含めた提案はさすがに支持を得られにくかったようで、世論は厳しい反応を示すことになる。²⁷⁾

保守党の地方選マニフェスト「Local Conservatives, Local Issues, Local Action」では、地方政府に対するホワイトホール支配への批判、保守党支配のカウンシルにおける公共サービス評価の高さが強調するものだったが、これに先だっておこなわれた「Give us our money back」と題するダンカン・スミスの演説でも、労働党が「ミドル・イングランド」に重い地方税を課して労働党支配のカウンシルに補助金を配分している、と訴えるとともに、学校や病院のような問題は地方でしか解決できない問題であるとして、R I N アジェンダ同様、「社会」「コミュニティ」「社会資本」「市民社会」「ヴォランティア・セクタ」の重視が掲げられている。これらの主張のなかには、サッチャー期に地方政府の自律性を抑制しようとしたきらいがあったことへの一定の反省もみられる。²⁸⁾

五月一日の地方選では、得票率こそ三〇％程度ながら、労働党を若干上回って大幅な議席増を実現し多くの都市の支配権を奪回したことで、結果次第では進退を問われかねなかったダンカン・スミスが党首としての地位をひとまず保持した。しかし、そのその得票率と四月下旬に行われたBBC/ICMによる世論調査「Labour Six Years Survey」をみれば、保守党への信頼が回復したわけではないことは明らかである。NHSの処遇に関して最も信頼できる政党に挙げられたのは労働党二八％、自由民主党二〇％に比べて、保守党は一五％に過ぎなかった。²⁹⁾ 経済運営能力に関する信頼も労働党四七％に対して保守党二八％であり、A B 層（五一％対四〇％）を除けば依然として大きく水をあけられている。

このような状況下における地方選の勝利が、結果として保守党に何をもたらしたのだろうか。思い起こせば九九年、中間の地方選挙で議席を回復したヘイグは、難民問題や法と秩序問題など「社会的保守」のアジェンダで攻勢をかけ、大規模減税案を復活させた。これが有権者の全体的なムードと合致していなかったことは先に指摘したとおり

である。ダンカン・スミスは今回の地方選挙に先立って人事問題などで右傾化の兆しを示すとともに、右派的なアジェンダで政府に対して攻勢に立とうとした。

ダンカン・スミス当選から〇三年春まで、ユーロ加盟の問題は後景に退いていた。年頭に表明されたブレアのユーロ加盟への情熱的な訴えにもかかわらず、一月六日、ウェールズ相ヘイン (Peter Hain) はユーロ加盟のタイミングはあくまで「五条件 (the five economic tests)」に基づいて決定することを言明していた。有権者は一貫してユーロ加盟には懐疑的でありつつも、その注目度は一貫して低かった²¹⁾。しかし、地方選で自信を深めたダンカン・スミスは、ユーロ問題に関する長い沈黙を破り、改めてユーロ加盟への反対を言明するとともに、レフェレンダムの即時実施を要求した。レフェレンダム実施についての判断の最終期限とされていた六月七日が近づくとともに、EU憲法のドラフト作業が進行しつつあることを睨んだ動きと考えられる。

また、ヘイグ期に提唱された厳格な難民政策 (庇護志願者の締め出し) が再確認された。庇護を求める者を洋上に留め置いたうえで迅速な処理を行うという主張である。さらにこうした処置を行うために、国連難民規約やEU人権条約から一時離脱するとともに、後者の修正を求める可能性についても言及されている。こちらは世論調査に現れた有権者の危機感に合致した動きではある。レトウィン影の内相は、本来代表的モタナイサーの一人であるが、あくまで一時的な、「緊急避難的措置」であることを強調しながら (ダンカン・スミスがそういつているわけではない)、この決定に従っている。彼はそのような政策も、長期間決定を遅らせて不自由な状態に留めおくよりは人道的であると発言している。

現状では、保守党の「ポスト・サッチャリズム」の模索がどのような地点で落ち着くのか、いまだ不確定要素が多い。保守党がダンカン・スミス路線・ブレアのイラク攻撃決定のプロセスにおける情報操作疑惑への攻撃をはじめ、減税・反ユーロ・反難民といったミドルクラス向けのポピュリズム的アジェンダと、伝統的価値の再興に基づ

く‘inclusive’あるいは‘compassionate’な社会というビジョンとその中の公共サービス改革との組み合わせによって支持を回復することがかなうのか。それとも一部のモダンイザーたちがいうように、より根本的な変化を遂げねば有権者の信頼は取り戻せないのか。当面は、ポピュリスト的政策への傾斜が進むなかで、R1Nというビジョンを軸にモダンイザーと権威主義者との程度妥協を続けていけるのか、そのビジョンが実際に有権者の信頼をどれだけ得られるかということがポイントとなろう。中道を奪われた保守党の、政権復帰のシナリオとして現在最も整備が進んでいるのはこのようなビジョンであるが、その基盤は依然として不安定なままなのである。

References :

- The Guardian Unlimited
 Electoric Telegraph/Sunday Telegraph
 Times Online
 Financial Times
 Daily Mail/Sunday Mail
 Conservative Party Website (www.conservatives.com)
- Alderman, Keith and Neil Carter (2002) “The Conservative Party Leadership Election of 2001.” *Parliamentary Affairs*. Vol. 55. No. 3. pp. 569-585.
- Alderman, Keith (1999) “Revision of Leadership Election Procedures in the Conservative Party.” *Parliamentary Affairs*. Vol. 52. No. 2. pp. 260-274.
- Baker, David and Dav ン・スミス ed. (1998) *Britain for and against Europe : British Politics and the Question of European Integration*. Oxford : Clarendon Press.
- Berrington, Hugh and Rod Hague (1998) “Europe, Thatcherism and Traditionalism : Opinion, Rebellion and the Maastricht

- Treaty in the Backbench Conservative Party, 1992-1994." In Hugh Berrington, ed. *Britain in Nineties : The Politics of Pandax*. London : Frank Cass, pp. 44-71.
- Bevir, Mark and R. A. W. Rhodes (1998) "Narratives of Thatcherism." In Hugh Berrington, ed. pp. 97-89.
- Catterall, Peter (1994) "The Party and Religion." In Anthony Seldon and Stuart Ball, eds. *Conservative Century*. Oxford : Oxford University Press. ch. 17, pp. 637-670.
- Cooper, Andrew (2001) "A Party in a Foreign Land : The Tory Failure to Understand How Britain Has Changed." In Edward Vaizey, Nicholas Boles, and Michael Gove, eds. *A Blue Tomorrow : New Visions for Modern Conservatives*. London : Politico's, pp. 9-29.
- Cowley, Philip and Philip Norton (1999) "Rebels and Rebellions : Conservative MPs in the 1992 Parliament." *British Journal of Politics and International Relations*. Vol. 1. No. 1. pp. 84-105.
- Cowley, Philip and Stuart Quayle (2002) "The Conservatives : Running on the Spot." In Andrew P. Geddes and Jonathan Tonge, eds. *Labour's Second Landslide : The British General Election 2001*. Manchester : Manchester University Press. ch. 3, pp. 47-64.
- Cowley, Philip (2000) "British Parliamentarians and European Integration : A Re-examination of the MPP Data." *Party Politics*. Vol. 6. No. 4. pp. 463-472.
- Durham, Martin (1991) *Moral Crusades : Family and Morality in the Thatcher Years*. New York : New York University Press.
- Evans, Stephen and Greg Clark (2002) "The Care Crisis : An Assessment of the Crisis in Britain's Care of the Elderly." Conservative Policy Unit.
- Evans, Geoffrey and Pippa Norris, eds. (1999) *Critical Elections British Parties and Voters in Long-Term Perspective*. London : Sage Publications.
- Evans, Stephen and Sean Williams (2002) *The Wrong Prescription : A Critique of Labour's Management of the NHS*. London : The Conservative Policy Unit.
- Garnett, Mark and Philip Lynch (2002) "Bandwagon Blues : The Tory Fightback Fails." *Political Quarterly*. Vol. 73. pp. 29-37.
- Ham, Christopher (1999) *Health Policy in Britain : The Politics and Organisation of the National Health Service*, 4th edn. Basingstoke : Palgrave.

- Harris, Robin. ed. (1997) *Margaret Thatcher : The Collected Speeches*. London : Harper Collins.
- Hayes, Bernadette C. (1997) "Gender, Feminism, and Electoral Behaviour in Britain." *Electoral Studies*. Vol. 16. No. 2. pp. 203-216.
- Heath, Anthony, Roger Jowell, Bridget Taylor, and Katarina Thomson (1998) "Eurocepticism and the Referendum Party." *British Elections & Parties Review Volume 8 : The 1997 General Election*. pp. 95-110.
- Heppell, Timothy (2002) "The Ideological Composition of the Parliamentary Conservative Party 1992-1997." *British Journal of Politics and International Relations*. Vol. 4. pp. 299-324.
- Kelly, Richard (2001) "Conservative Under Hague : The Fatal Dilemma." *Political Quarterly*. Vol. 72. pp. 197-203.
- Kelly, Richard (2002) "The Party Didn't Work : Conservative Reorganisation and Electoral Failure." *Political Quarterly*. Vol. 73. pp. 38-43.
- Kent, Nicholas (1999) "A Lack of Common Sense ?" *Reformer*. No. 30/10/1999. Tory Reform Group Website. <http://www.trg.co.uk>.
- King, Anthony, John Bartle, Ivor Crewe, David Denver, Philip Norton, Patrick Seyd, and Colin Seymour-Ure. eds. (2002) *Britain at the Polls, 2001*. London : Chatham House Publishers of Seven Bridges Press.
- Lovenduski, Joni, Pippa Norris, and C. Burness (1994) "The Party and Women." In Anthony Seldon and Stuart Ball. eds. *Conservative Century : The Conservative Party since 1900*. Oxford : Oxford University Press. pp. 611-635.
- Lovenduski, Joni (2001) "Women and Politics : Minority Representation or Critical Mass ?" *Parliamentary Affairs*. Vol. 54. No. 4. pp. 743-758.
- Nadler, Jo-Anne (2000) *William Hague : In his Own Right*. London : Politico's.
- Norris, Pippa and Joni Lovenduski (1995) *Political Recruitment : Gender, Race and Class in the British Parliament*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Norris, Pippa (1999) "Gender : A Gender-Generation Gap ?" In Geoffrey Evans and Pippa Norris. eds. *Critical Election*. Sage Publications. ch. 8, pp. 148-163.
- Norris, Pippa (2001) "Apathetic Landslide : The 2001 British General Election." *Parliamentary Affairs*. Vol. 54. pp. 565-589.
- Olasky, Marvin (2000) *Compassionate Conservatism : What it is, What it Does, and How it Can Transform America*. New York : Free Press.

- Pilbeam, Bruce (1998) "The Conservative Party and the Problem of Contemporary Conservatism." Contemporary Political Studies, Paper presented for Political Studies Association Conference.
- Pilbeam, Bruce (2003) "What Ever Happened to Economic Liberalism?" *Politics*. Vol. 23. No. 2. pp. 82-88.
- Portillo, Michel (1998) *Democratic Values and the Currency*. London : The Institute of Economic Affairs.
- Saggar, Shamit (2000) *Race and Representation : Electoral Politics and Ethnic Pluralism in Britain*. Manchester : Manchester University Press.
- Saggar, Shamit (2001) "Race Card, Again." *Parliamentary Affairs*. Vol. 54. pp. 759-774.
- Sanders, Clarke, Harold David, Marianne Stewart, and Paul Whiteley (2001) "The Economy and Voting." *Parliamentary Affairs*. Vol. 54. pp. 789-802.
- Streeter, Gary, David Willems, and Ian Duncan Smith. eds. (2002) *There is Such a Thing as Society*. London : Politico's.
- Tate, John and Greg Clark (2002) "The Children Left Behind." Conservative Policy Unit.
- Thatcher, Margaret (1993) *The Downing Street Years*. London : Harper Collins.
- Thatcher, Margaret (1995) *The Path to Power*. London : Harper Collins.
- The Conservative Party (1999) "The Common Sense Revolution."
- The Conservative Party (2000) "Believing in Britain."
- The Conservative Party (2001) "Renewing Civil Society."
- The Conservative Party (2002) "Leadership with a Purpose : A Better Society."
- The Conservative Party (2003a) "Cutting the Conveyer Belt to Crime."
- The Conservative Party (2003b) "Setting the NHS Free."
- The Conservative Party (2003c) "Sixty Million Citizens : Unlocking Britain's Social Capital."
- The Tory Reform Group (2001) "Lessons from the 2001 General Election : Winning Back the Missing Conservatives." The Tory Reform Group Website.
- Vaizey, Edward. ed. (2002) *The Blue Book on Health : Radical Thinking on the Future of the NHS*. London : Politico's.
- Whiteley, Paul, Patrick Seyd, and Jeremy Richardson (1994) *True Blues : The Politics of Conservative Party Membership*. Oxford : Oxford University Press.
- Whiteley, Paul, Harold Clarke, David Sanders, and Marianne Stewart (2001) "Turnout." *Parliamentary Affairs*. Vol. 54. pp.

775-788.

Williams, Sean (2002) *Alternative Prescriptions: A Survey of International Healthcare Systems*. London: The Conservative Policy Unit.

Worcester, Robert and Roger Mortimore (1999) *Explaining Labour's Landslide*. London: Politico's.

Worcester, Robert and Roger Mortimore (2001) *Labour's Second Landslide*. London: Politico's.

梅津 實 (二〇〇二) 「野党党首としてのウィリアム・ヘイグ：一九九七年―二〇〇一年のイギリス保守党」『同志社法学』第二八四巻、一―三四頁。

岡山勇一・戸澤健次 (二〇〇二) 「サッチャーの遺産：一九九〇年代の英国に何が起ったのか」見洋書房。

阪野智一 (二〇〇一) 「イギリスにおける政党組織の変容——党組織改革と人民投票の政党化への動き」『神戸大学国際文化学部国際文化学研究』第一六巻、一五―五六頁。

武田文祥 (一九九九) 「医療保障政策：成功と挫折の交錯」毛利健三編『現代イギリス社会政策史一九四五―一九九〇』ミネルヴァ書房、第三章、一五五―二四頁。

富崎 隆 (二〇〇三) 「二〇〇一年イギリス総選挙における投票行動：Second Landslideの要因」『選挙研究』第一八巻、五八―七七頁。

成廣 孝 (二〇〇二) 「ポスト・サッチャリズムの政治：イギリス保守党と二〇〇一年の二つの選挙」『岡山大学法学会雑誌』第五一卷、第三号、五五六―六七頁。

カ久昌幸 (二〇〇三) 『ユーロとイギリス：欧州通貨統合をめぐる二大政党の政治制度戦略』木鐸社。

※ BIPTEX による参考文献リストの出力にあたり飯田修氏の jpolisci.sty を使用させて頂いた。感謝申し上げます。

(*) 本稿は二〇〇三年度日本比較政治学大会（於大阪大学）の分科会「ポスト新保守主義の保守政治」において「ポスト・サッチャリズムの政治：ヘイグ以降のイギリス保守党」として報告したものと既発表部分を除くとともに一部修正したものである。当該セッションを企画された阪野智一、報告者である野田昌吉、森本哲郎、コメントイターとして有益なコメントを寄せられた飯尾潤、水島治郎の各氏、および質問・コメントを寄せられた参加者の方々に感謝したい。

(1) 本稿では「さしあたり」サッチャリズム (Thatcherism) を「サッチャー (Margaret Thatcher) およびメイジャー (John Major) 両政権期に追求された、内政における福祉国家・「ストップ・ゴー」型マクロ経済運営を中心とする国家介入および

